平成 25 年度

ドイツ（バート・メルゲントハイム市）国際交流視察事業
友好交流視察団　事業報告書

平成２５年１１月４日（月）～１１月１１日（月）【8日間】

バート・メルゲントハイム訪問団

平成25年11月4日（月）～11月11日(月)

［日程表］

日次	月日（曜）	都　市　名	発着	時間	交通機関	日　　程	宿　泊
①	11・4 （月）	笛吹市 成田空港 成田空港 フランクフルト フランクフルト ﾊﾞｰﾄ・ﾒﾙｹﾞﾝﾄﾊｲﾑ	発 着 発 着 発 着	6:00頃 **12:25** **16:40**	バス **JAL－407** 専用バス （146KM）	石和スコレーパリオ側駐車場よりバスにて一路成田へ 空港到着、出国手続き 空路、フランクフルトへ フランクフルト国際空港到着 その後、専用バスにて バート・メルゲントハイムへ 到着後、市内ホテルへ	**バート メルゲントハイム**
②	11・5 （火）				専用バス	ホテルにて朝食後 終日バート・メルゲントハイム市視察・交流会 （農業、産業、文化施設等） **バート市主催：晩餐会**	**バート メルゲントハイム**
③	11・6 （水）				専用バス	ホテルにて朝食後 終日バート・メルゲントハイム市視察・交流会 （農業、産業、文化施設等） **笛吹市主催：さよならパーテイー**	**バート メルゲントハイム**
④	11・7 （木）	ﾊﾞｰﾄ・ﾒﾙｹﾞﾝﾄﾊｲﾑ ローテンブルグ ローテンブルグ バーデンバーデン	発 着 発 着	9:00 10:00 13:00 17:00	専用バス （46KM） 専用バス （230KM）	朝食後 BECKSTEIER-WINZER(ワイン醸造所） ローテンブルグ市内視察 昼食後、温泉保養地の バーデンバーデンへ	**バーデンバーデン**
⑤	11・8 （金）	バーデンバーデン フュッセン （シュバンガウ）	発 着		専用バス （317KM）	午前：バーデンバーデン温泉施設視察 午後：専用車にてフュッセンへ ルートヴィヒ2世の夢の城のある町へ （ノイシュヴァンシュタイン城）	**フュッセン （シュバンガウ）**
⑥	11・9 （土）	フュッセン ﾎｰｴﾝｼｭﾊﾞﾝｶﾞｳ ﾎｰｴﾝｼｭﾊﾞﾝｶﾞｳ ヴィース ミュンヘン	発 着 発 着 着		専用バス （4KM） 専用バス （25KM） （80KM）	朝食後 フュッセン近郊の ノイシュヴァンシュタイン城（白鳥城） その後 草原に建つヴイース教会へ ﾖｰﾛｯﾊﾟで最も美しいロココ様式の教会の一つ その後、ミュンヘンへ ≪バイエルンの都はビールの本場≫	**ミュンヘン**
⑦	11・10 （日）	ミュンヘン ロンドン ロンドン	発 着 発	**16:05** **17:15** **19:00**	**BA－953** **JAL－402**	前日同様、ミュンヘン市内観光 新市庁舎・ヴィッテルスバッハ王家の宮殿・ FCバイエルン・ミュンヘンの本拠地サッカー場 その後空港へ 空路。成田日本へ	**機中**
⑧	11・11 （月）	成田空港 笛吹市	着 着	**16:00** 21:00頃	 専用バス	入国後 山梨へ・解散	

平成 25 年度
ドイツ国際交流視察事業
友好交流視察団事業報告

１１月　４日（月）～１１月１１日（月）【８日間】ドイツ国際交流視察事業実施

１１月　４日　午前５時４０分　石和スコレーパリオ駐車場　出発（大型バス乗車）
『雨』　　一宮釈迦堂ＰＡ経由　成田空港へ
　　バス内にて出発セレモニー
　　午前９時００分　成田空港着　チェックイン　両替　携帯電話ﾚﾝﾀﾙ
　　午後０時２５分　ＪＡＬ４０７便にて成田空港出発
　　午後４時５０分　フランクフルト空港着
　　（フライト時間約１２時間３０分）　日本との時差８時間
　　午後７時４０分　バート・メルゲントハイム市内　ホテル着
　　ホテルに姉妹都市交流委員会委員、国際交流担当職員、高松夫妻他多数出迎え
　　会議のため遅れていたバート市長、副市長も駆けつけてくれた

１１月　５日　午前８時３０分　市庁舎訪問　歓迎セレモニー
『曇り』　　庁舎内案内の後、市内視察
　　（ソリマー、クア施設、日本庭園）
　　公園内の喫茶店にて昼食（バート市長、担当職員も同席）
　　午後２時１０分
　　クア公園（記念碑、桜、石灯籠）、騎士団城、
　　旧市役所庁舎（現：観光局）視察
　　午後７時２０分　歓迎レセプション（バート市主催）
　　（バート市側出席者１５名）
　　プレゼント交換
　　午後１０時５０分終了

１１月　６日　午前９時００分
『曇りのち雨』　・ウルト・インダストリーパークについて　会社役員より説明
　　・バート・メルゲントハイム市について
　　市役所経済開発推進課長、観光局局長より説明
　　・マイン・タウバー地方の経済開発発展について
　　中小企業センター職員より説明
　　ウルト・インダストリーパーク施設内視察、昼食（社員食堂）

午後２時１５分　発電所【自然材料（木材）を使う発電所】視察
午後３時５０分　「ヘルブストヘウイサー」ビール製造工場　視察
午後７時００分　笛吹市主催夕食会（宿泊ホテルレストラン）
（バート市側出席者１５名出席）
　ピアノ演奏と歌の披露
午後１０時３０分終了

１１月　７日　午前８時４０分　ホテル発
『曇り』　　副市長、国際交流担当職員、姉妹都市交流委員会笛吹部長見送り
　ワイン醸造所（ベックシュタイン ヴィンツァー）視察
午前１０時３０分　ローテンブルク着　市役所庁舎視察
昼食後、温泉保養地バーデン・バーデンへ
午後７時００分　ホテル着

１１月　８日　午前９時００分　ホテル発
『雨』　午前中　バーデン･バーデン　カラカラ浴場など温泉施設視察
昼食後、フュッセンへ
午後７時００分　ホテル着

１１月　９日　午前９時００分　ホテル発
『小雨』　午前中　ノイシュバンシュタイン城（白鳥城）見学
昼食後、ヴィース教会（世界遺産）見学、その後ミュンヘンへ
午後４時１０分　ホテル着

１１月１０日　午前８時５０分　ホテル発
『曇りのち雨』午前中　ＦＣバイエルン・ミュンヘン本拠地サッカー場
（アリアンツアレーナ）
ミュンヘン新市庁舎、王家の宮殿　見学
昼食後、ミュンヘン空港へ
午後４時４５分　ＢＡ９５３便にてミュンヘン空港出発
午後５時４５分　ロンドン（ヒースロー）空港着
（フライト時間約２時間００分）　ドイツとの時差１時間
午後７時００分　ＪＡＬ４０２便にてロンドン（ヒースロー）空港出発

１１月１１日　午後３時３０分　成田空港着（フライト時間約１１時間００分）
『雨のち曇り』　日本との時差９時間
午後８時５０分　一宮釈迦堂ＰＡを回り、石和スコレーパリオ駐車場着
（解散）

バート・メルゲントハイム市　ウド・グラットハール市長　お出迎え

バート・メルゲントハイム市庁舎

市庁舎にて歓迎セレモニー

市長室にて倉嶋市長、ゲストブックにサイン

石和町で贈った石灯籠　（クア公園）

友好交流記念碑の前で（クア公園）

クア公園内の並み木道

日本庭園 （クア公園）

旧市役所庁舎前

バート市主催　歓迎レセプション

レセプションでの様子

個人ごとにプレゼント交換

ドイツ騎士団城

ウルト（企業）での学習会

ウルト物流センター内

木材を原料とする発電所視察

ビール製造工場視察

笛吹市主催　夕食会

笛吹市主催　夕食会

お礼のしるしに唄を披露
野ばら／上を向いて歩こう／赤とんぼ

前島議長の音頭で万歳三唱

ローテンブルグ市庁舎

ノイシュバンシュタイン城

ヴィース教会（世界遺産）

ヴィース教会内（世界遺産）

ミュンヘン市庁舎

アリアンツアレーナ
（2006年ドイツW杯　試合会場）

高速道路（PA）のトイレ入口には自販機が設置してある
- ・70セントの使用料を入金する
- ・50セントの金券が出てくる
- ・金券はPA内で利用できる

（1ユーロ　約135円　（視察時現在）
1ユーロ＝100セント）

バート・メルゲントハイム市への贈り物

事前研修会の様子

聞きたいこと、事前に調べたことなどを整理した

ﾊﾞｰﾄﾒﾙｹﾞﾝﾄ市訪問　　みずみずしい？話　　三浦克弥

Guten Abend!（こんばんは）　と温かく迎えられた。街には笛吹市の旗がなびいていた。バートメルゲントハイム市とバーデンバーデンは、温泉を利用した保養施設、療養施設が特徴である。きけば戦時中でも重要な軍事施設もなく、病院などがあったためか、戦災、爆撃はあまりなかったという。古くからの施設や住宅がそのまま残っていて、２，３百年前の建物などざらで，しっとりした石造りの街並みは落ち着いたヨーロッパの良さを感じさせるものだった。少し体験的な前置きを記したい。「水道水は硬水だから飲むな」と言われてきたが、ミネラルウオーターもなくなって、洗顔の時コップ 1 杯の水を飲んだ。少しぐらい何ともあるまいと思ったのだが、午後には下痢気味になった。いつも過敏性腸症で下痢は当たり前だから気にもしなかった。その後はミネラルウオーターをよく飲んでいたが、夕食時に氷をもらってコニャックを飲んだ。こういうリキュールは手で温めて上品に香りを楽しむものとされているが、僕は野蛮な飲み方がくせになっている。冷蔵庫で作ったあの四角い氷が出てきた。かち割りのあのガラーンとしたやつがほしかったのだが。その夜から下痢がひどくなった。普通旅に出ると常習的な下痢はなくなるのだが、どうも今回は違う。冷蔵庫の氷は解ければその辺の水道水だから、１杯どころか何杯も水道水をガブ飲みしたことになる。メルゲントハイムの温泉は 4 か所のうち 1 か所が入浴用であとは飲用鉱泉(飲泉)だという。羊たちが川に流れこむ泉に群がって飲む事がきっかけで発見された温泉だという。その鉱泉を何種類か試飲したが、そのうちの一つは、とても塩辛くて少しだけ飲んだだけだった。その後散歩中にすぐしぶり腹になった．激烈な効果だが、下剤のマグネシウム（Mg）塩そのものだと思った。説明のボードを読んだら、やはり泉質は硫酸塩、Mg 塩やカルシウム（Ca）塩などであった。温泉を飲むという、飲泉は日本でも少しあるが、ドイツでは当たり前のようだ。糖尿病などもここでは飲泉療法をするようだ。飲泉に加えてインスリンも併用するのだと、交流協会の人が大きなビール腹をさすりながら語っていた。僕には一体、何が効くのかな?　という疑念が残った。でもその後、お腹は自然とよくなった。ビール工場ではビールは体に良いと言われたし、ワイン醸造所でもワインは健康のためになると推奨されたので、水ではなくもっぱらビールとワインを痛飲することになったためだった。確かに下痢はしないし､お腹に良い飲み物であった｡旅行前の調べでは硬水は Ca や Mg、炭酸塩などが多く、温泉療法医の指示で飲用するものだと書いてあった。帰国後、飲泉への疑問を調べてみてびっくりした。

　ここからが本論。有名なミネラルウオーター、エビアン　も硬度 300 以上と

いう硬水（硬度＞１２０）であった。ひどいのは水！で薄めなければ飲めないという塩酸より強い酸性の水もあるそうだ。それでもその辺の水道水よりはましという程度なのだ。日本の水道水が硬度 60 ぐらいだから、とても高い硬度なのだ。硬水では煮干しや昆布のだしもとれない。豆も煮ると固くなってしまうが、肉ならあくがすぐとれて煮崩れしない。放射能を心配して、ミネラルウオーターで炊いたメシはまずかったという。だから日本と欧米では水の違いで料理法も完全に変わってしまう。日本は軟水というわけも初めて知った。日本列島は流れが急峻なために、雨水が地表から枯葉の下をくぐって地層の中に深く浸透する間もなく河川に流れ込むせいだという。このためミネラル分が少ない軟水となる。一方ヨーロッパなどは岩盤にゆっくり浸透してミネラルの多い硬水となる。水道水＞ミネラルウオーター＞＞軟水。こうして解ったことは、日本の水道水は世界でも有数の軟水で、安全であり飲める水だという事。ナント！世界的には水道水は飲めないのが普通なのだ。水道水では病気を治せないだろうが、水道水に比べ水質基準が緩く、ヒ素！や水銀！や鉛！までもある程度までは許容されている飲泉はおろか、ミネラルウオーターなどの誇大な宣伝は大いに怪しむべきだろう。はたして、飲泉で病気は治せるものか？逆に水で病気になるのではないか？とさえ思う。「良く効く」という話も古来からの伝説であり、効能が一見科学的に人を引き付けたのはなんと、日本の近代西洋医学を指導したﾍﾞﾙﾂ博士が草津温泉を視察してのたまわれたことによる。因みにﾍﾞﾙﾂ博士はドイツの医学の泰斗であり、名声のためにそうなってしまったのだろう。

いよいよ結論。サントリーウイスキー白州のモルト１２年物をマザーウオーターの白州のミネラルウオーターで割って飲むのが、山梨に生きるものとして、またとない無上のヨロコビなのに、果たしてイイのか？でもそのとき「アンタ、お酒が身体にイイわけないジャン！」と、奥の方から壊滅的な喝破あり。ホントは美味いかどうかしか考えてないのだ。　石和温泉、やはり飲泉はやめとこう。リラックスして心身ともにリフレッシュすればそれだけで十分にあり難い。

Auf Wiedersehen!　Vielen Dank.!(さようなら、ありがとう)

笛吹市ドイツ国際交流視察事業に参加して

三浦　昭子

今回、幸運なことに標記の視察団として、バート・メンゲルトハイム市を中心とするドイツを訪問する旅に参加できた。

森や牧草地に囲まれた中世都市の歴史を引き継いだ石畳みや城塞のバート・メンゲルトハイムの美しい町並みは感慨深いものがあった。そればかりでなく、市の入口に立ててある旗の隣には必ず笛吹市の旗がたなびいており、私達視察団に窓から手を振ってくれる市民の姿など、市を挙げての歓待振りに心から感激した旅であった。

どれも印象的であったが、その中でも以下の２点について述べる。

１、　温泉と健康について

温泉療養、保養地としての歴史は、温泉発見から見ると、バート・メンゲルト市は 1826 年であり、笛吹市の歴史は 1961 年であり、約１世紀余りの違いがあるので、一概には比較できないが、温泉利用について興味があった。クワパークといわれる温泉療養施設とソリマーと呼ばれる温泉を利用した総レジヤー施設（建設中）の見学をした。クワパークは温泉を利用し健康の増進や治療が行われおり、年間７０万人、一日２０００人の利用者があるとのことであった。

それぞれの治療コースによる１０７のクリニッがあり、医師をはじめとする、医療関係者が多数従事している。ここを利用するためには、先ずホームドクターの診察を受け、その後温泉ドクターに治療方針を決めてもらい、その治療方針に沿っての治療が滞在型として始まる。１クールが２週間～３週間であり、年４回ほど受けられる。これは鉱泉飲用療法も含まれ、医療保健の適用となる。

その他、自費による療養も設けており、主に糖尿病の患者さんが利用している。その内容は、教育セミナーの開催、合併症の早期発見の手伝いになっており、１週間～２週間の滞在となっている。また、周囲は広大な公園になっており、ドイツの最も美しい公園１０か所のうちの一つに選ばれているそうである。色とりどりの花々や木々の移りゆく様を眺め、小川のせせらぎを聞きながらリハビリコースを散策できる。市民も特別なイベントがない限り利用できる。犬を散歩させる者、子ども連れの家族、車いすや補助具を使いながらの療養者等、思い思いの楽しみ方をしていた。そして、年間 900 件ほどの催し（コンサート、花市場、森の散歩イベント等）が、周辺の州、郡、

市主催で行われ、療養者は無料、一般市民も 400 円程度で参加や鑑賞ができるそうである。

案内してくださった方の「ここは、単なる温泉療養所ではなく、“古い町、食物、温泉の組み合わせ”で、利用者を迎えているのです」といった言葉が強く印象に残った。これは、後で分かったのだが、健康を望む人間が、バランスのとれた日常生活の中にいかに『人生の喜び』を見いだせるかを常に考えている施設だ、という意味なのだと思った。このコンセプトで、市の観光協会と連携して、療養・文化・スポーツの融合した総合リゾート地といわれる街づくりをしているのだ、ということが分かった。

２０１４年完成予定のソリマーは、各種サウナ、プール、レストラン、バーなどの家族で楽しめる総合レジャー施設だそうだ。官民一体の事業の様であり、資金繰りや建設工程等にも未だ困難がありそうだったが、保養の街づくりとしての熱意を強く感じた。

笛吹市も温泉地であり、多くの観光客を迎え、様々な工夫をしている。“健康と観光の石和温泉郷”のキャツチフレーズを更に発展させ、市民も観光客も、温泉を楽しみながら、文化・スポーツも楽しめ、ゆったりとした気分になれるパークがあれば良いと思う。そして、そこでは、年間、大小様々なイベントが開催され、気楽に観光客、市民も楽しめたら、と夢の様なことを考えた。

バート・メンゲルトハイムのクワ施設と観光業務の運営は、観光協会と呼ばれる公的に認知されている法人と、市、クワ管理会社の三者が行っていた。

また、これは日本の話であるが、子どもたちが、はだしでも走れる様な公園づくりをしようと、各年齢層の地域住民が自らプロジェクトを作り、計画、設置、運営（芝生の維持管理含め）を行政と手を組んで、ボランティア活動も含め街づくりを進めている地域もあるそうである。

それらを参考にした時、笛吹市はバート・メンゲルトハイム市と比し、人口は３倍以上であるが、面積も２倍弱あるのだから、官民一体となり、住民も参加した温泉資源を活用した街づくりも夢ではないようにも思える。

２、　住みよい環境つくりについて

ドイツは環境保護意識の高い国と聞いていたので、発電所の見学は興味深いものであった。2012 年に開始されたばかりのこの発電所は自然資源（森の廃材と工場からの廃棄物）を使用した燃焼エネルギーを電力と暖房に変換していた。休日も無人でコントロールできるシステムがあり、暖房で、2000 世帯、電力として 2000 世帯に供給している。単価は一般家庭で、１kw25 セント(32 円程度)、暖房はオイル使用より安価で提供している。また、燃焼

後の廃棄物も 98%は濾過し、残った 2%の灰も再利用し、自然環境の循環にも寄与しているとのことであった。

総事業費（8 ミリオンユーロ＝約 10 億円）や耐用年数（10 年～40 年）には多難性を感じたが、それよりも、この様な小さな市でも、自分たちで、自然エネルギーを生み出そうとする発想と実践力がすごいと感じた。

日本と共通した戦後史をたどり、日本とほぼ同規模の工業大国のドイツが、国民主導で、脱原発・省エネ・自然エネルギー推進の道を歩んでいるその姿を垣間見た思いがした。「ドイツの他地域での取り組みはどんな様子か」と質問したが、あまり着々といった感じではなく、思考錯誤しているという回答であった。しかし、後で聞いたガイドさんのお話しでは、日本の福島の原発事故を教訓に、さらにドイツは脱原発、省エネ、自然エネルギー推進気運は高まっている、ということであった。

また、普段の生活や消費行動にも、省エネや地球温暖化防止の精神が現れていた。土産の包装紙にしても、頼まなければくれなかったし、暖房の節約、日用品を自分で作る、ごみを減らす、車になるべく乗らない等を期間限定ではあるが行っている地域もあると聞いた。この様に、自分で出来ることから行動する持続可能な暮らし方するドイツ人の生活スタイルは見習うべきだと思った。

温泉リゾート市バーデン・バーデンでの、青、黄色、白のごみの回収ボックスが整然と並び、違和感なく町並みとマッチしていたことも印象に残っている。

成田は雨であった。帰りのバスから、東京湾の雨上がりの夕焼けを眺めた時、日本人と笛吹市民を深く意識した。そして、今回の旅を企画担当された日本、ドイツ両国の関係者の皆さん、旅をより楽しいものにしてくれた偶然にも出会った一行の皆さん、無事帰って来られた自分自身の健康に対しての感謝の気持ちでいっぱいになった。

平成 25 年度　ドイツ国際交流視察事業参加レポート

平成 25 年 11 月 28 日

平塚しのぶ

今回ドイツ国際交流視察事業に参加させていただきましたので、報告書を提出いたします。

日時：　11 月 4 日～11 月 11 日（8 日間）
場所：　バート・メルゲントハイム市他

1 日目：市庁舎、温泉施設“ソリマー”リフォーム現場、クアパーク、ドイツ騎士団の城見学
2 日目：Würth インダストリーパーク、自然材料を利用した発電所、ビール工場見学
3 日目：ワイン醸造所見学、ローデンブルグ市視察、移動
4 日目：バーデンバーデン市視察、移動
5 日目：フュッセン市、ノイシュバンシュタイン城、ヴィース教会見学、移動
6 日目：ミュンヘン市、サッカー場見学、帰国

私はアメリカに 1 年語学留学していた経験があるので、国際交流に興味がありました。様々な都市に姉妹都市があります。私が留学していたのは、山梨県の姉妹都市であるアメリカのアイオワ州でしたが、笛吹市はどうなのかと思っていたところ、たまたま広報で市民の視察を行うことを知り、応募しました。

姉妹都市とは、どのような交流があるのか？市民レベルとしてはどのような交流があり、どう参加できるのか？また、英語を話すことで国際交流に何か貢献ができないだろうか、と考えていました。英語が話せると、どこに行ってもその国の方とコミュニケーションがとれ、旅行でも普通のツアーとは違った楽しみがあります。国際交流とは、コミュニケーションだと思います。出かけるまでもなく、今の時代まわりにたくさんの外国人がいます。彼らは日本に来て、日本語を勉強し、生活していこうとしています。その人たちとコミュニケーションすること、これも国際交流であると考えています。

笛吹市は、石和町の頃からドイツのバート・メルゲントハイム市を姉妹都市に選び、交流を続けてきました。バート・メルゲントハイム市にはほかにも２つの姉妹都市がフランスとイタリアにあります。市に到着して気が付いたのは、姉妹都市の旗が市庁舎と市庁舎前広場にかかげられていたことと、都市名が市の主要道路沿いに明記してあったことです。市民にも姉妹都市であることが浸透していると感じました。また、国際交流の担当があり、笛吹担当の方もいました。彼らのあいさつも、日本語を交え、たどたどしいながらも歓迎の思いが伝わってくるスピーチでした。

バート市の人口は約２万２千人。市庁舎はしごくシンプルで、受付が要件に応じて３段階に分かれています。受付での来庁者は、一日 20 人から 70 人とのことです。銀行だった建物に最近引っ越し、旧市庁舎には観光局のみが残っています。１階の受けつけには、子供を連れて来た人が、子供を遊ばせておけるスペースも新しく設けられました。市民に近い市庁舎という印象を受けました。

私達の班は、温泉施設を重点に見学を行いました。バートという名前は、国から温泉に関するお墨付きがないとつけられない名前です。温泉治療にも処方箋が必要であり、長期で滞在して温泉につかっての治療、また飲泉治療もあります。これらの治療には保険がききますが、一般の人が利用することも可能です。関節や脊椎の損傷、神経皮膚炎、乾癬等に効果があるようです。私たちも実際に温泉を飲んでみましたが、かなり塩辛い味がしました。いろいろな種類があり、便秘に効くもの等それぞれ効用があるようです。クアハウスも、コンサートを企画したり、広い公園や、様々な施設がありました。長期滞在する人が快適に過ごせるような工夫が見られました。同じような温泉関連ということで、バーデンバーデンにも視察に行きましたが、ここは高級保養地ということで、ショッピング施設も充実していました。こちらは滞在型の保養地です。

その他の産業で印象に残ったのは、Würth 社という、軍用地の跡地にできた会社です。ドイツという国のすごいところは、過去の歴史を良きにしろ、悪しきにしろきちんと認識しているということにあります。この会社にも敷地内に博物館があり、戦いの歴史を展示してありました。この会社には戦車も残っているそうです。この会社は、RFID チップを利用して、取引会社の部品の在庫管理を行い、空になった箱を回収し、3 日以内にほとんどの欧州圏内に部品を供給しています。広大な敷地内で、ベルトコンベアーにコンピュータ制御された箱が飛び交っていました。あれだけの広い土地を確保できるのは、軍用地だったからでしょうが、今も拡張し続けています。

その他、市のいくつかの設備も興味深く見学しました。ドイツはワインも、ビールもそれぞれの地方に特色のある醸造所があります。美味しくいただきました。

今回の視察を今後どのように役立てていけるのか？ただ行っただけでは終わっては意味がないと思っています。今回参加した 20 名の方たちと、今後もなんらかの形で交流を続け、何か笛吹市の国際交流のために貢献できればと考えています。そして、笛吹市も観光その他で訪れた方が 1 日でも長く滞在したくなるような、魅力的な街づくりを進めていただけたらいいなと思っています。そのために、お手伝いができるのであれば、いつでも声をかけていただきたいと思っています。貴重な体験をさせていただき、ありがとうございました。

バート・メルゲントハイムのクアパークについて

2013/11　廣瀬　富美江

笛吹市の姉妹都市のひとつであるドイツ連邦共和国バーデン＝ヴュルテンベルク州北部のマイン＝タウバー郡に属す都市バート・メルゲントハイム Bad Mergentheimの訪問にあたり、バートBadがドイツ語では風呂、温泉を意味し歴史ある温泉保養地であることを知りました。

私は、温泉が大好きで、県内はもとより近県の温泉地によく出かけます。地元石和温泉郷においては日頃からいろいろと残念に思うこともあり、今回、ロマンティック街道の歴史ある温泉地を訪れるにあたり、集客方法･施設など興味深く思っていましたので、その辺のところをクアハウスを中心にレポートしました。

ここクアパークは、独特な 4 つの部門、温泉ホテル・療養所・スパ・病院からなっています。11 月 5 日に訪れましたが、160,000 平方メートル(約 5 万坪)の面積と数々の充実した施設に驚かされました。

広大な敷地の中には以下の施設が点在しています。

１．日本庭園

小さな滝、日本の植物や花こう岩で作られたアーチ型の橋がある。勿論、姉妹都市である笛吹市の協力によるもので、1995 年に出来、設計は日本人でドイツの造園家が実現したとのこと。コンパクトではあるが石灯篭もあり、異文化を感じられるのでは。

２．ローズガーデン

1800 平方メートルに 18 種類以上のバラ園。花の咲く頃は訪れる人の目を楽しませることでしょう。訪問当日は秋の名残のバラが結構咲いていました。バラ園は必須ですね。

３．噴水

音楽と共に噴水ショウが日に数回あり、夜はライティングが行われる。私たちが訪れたときに特別？にショウを見せてもらったが、なかなか楽しいです。後ろは野外音楽堂。

４．カフェ（アマデウス）

野外ステージそばのレストラン/60 席、夏は外側にもカフェが広がりビアガーデンとして利用/80 席。私たちもランチをドーム型のガラス張りのカフェで楽しみました。明るくて気持ちの良い空間でした。

５．鉱泉飲料場

源泉？を飲めるところで、3 種類を試せる。健康のために医師などの指導の下に適量を飲ませている。私たちも試してみたが、1 つは非常に塩分が強くほんの一口しか飲めませんでした。ドイツは糖尿病患者が多くその療養でここの温泉施設が使われるとのことですが、この塩分の強い温泉水をどのように使用するのでしょうか。

６．玄関 ホール

1935 年に建てられ、1992/1993 年に改装された。スパオーケストラ、大規模な会議やサマーコンサートなどの音楽イベントでは、最大 690 人のための玄関スペースとのこと。

７．スパゲストハウス

シュトゥットガルトのBonatz建築家が 1922 年に建てた大邸宅は、現在、温泉医学科、健康教育と医療のスパを併設している。

８．クアハウスとバイタルセンター

イベントやカンファレンスセンターとして 1926 年に建てられ、その後機能を追加し再構築されました。最大 500 席の大ホールや 150 席の小ホールに会議室も併設。訪れた日はイベントの準備をしていた。

以上の施設は大きな柱となっているものですが、200 年の歴史があるだけのことがパーク全体に感じられます。タウバー川を上手に取り入れて設計している点も素晴らしいです。年間約 10 万客がこちらを訪れるとのこと。また、ソリマーという日帰りの温泉施設（現在リニューアル工事中）や 35ｈの野生公園も隣接するようにあります。

長期滞在で療養も出来、見舞いに来た家族ともゆったりとした時を過ごせるよう充実した環境に満ちています。

クアハウスの責任者であるカトリン（Katrin Löbbecke）氏が直接レクチャーしてくれ、ここでは年間約 600 のイベントを開催していることを知りました。娯楽から健康管理まで幅広く集客に力を入れています。

このクアパークはメイン施設、豊かな自然を取り入れた環境、ショッピングアーケードやレストランのハード面のみならず、ソフト面のイベントもしっかりして、集客力につながっていると感じました。

平成 25 年　ドイツ国際交流視察事業

ドイツ友好交流視察レポート

（報告書）

実施期間：　平成２５年１１月４日～１１月１１日

視 察 地 ：　バート・メルゲントハイム（ドイツ）

提出者氏名：　徳益妙子

【　はじめに　】

１９９１年５月当時の石和町とバート・メルゲントハイム市で友好交流協定が結ばれ姉妹都市交流が始まった。２００６年８月には芦川村との合併により笛吹市として再出発し２００７年１０月笛吹市として新しい約定所をかわし新たにバート・メルゲントハイム市との姉妹都市交流が始まった。

今回の視察事業目的は国際友好都市であるドイツのバート・メルゲントハイム市との交流を深めるとともに市民レベルにおいて当地及び周辺地域における温泉保養や地域産業事業振興などの先進的な取り組みについて学んで来ること。参加資格としては温泉産業に関心があり国際交流や国際互助活動の推進に積極的であること、心身の健康状態が良好で協調性に富みかつ友好訪問に賛同し規律ある団体生活ができること。

以上が目的及び参加資格であった。

【　視察にあたって　】

ドイツ友好交流視察団員は市長を団長に議長を副団長として一般参加団員 16 名及び事務局 3 名を含む総勢 21 名で構成された。

事前研修として一般参加団員を 3 班に分け 3 回の研修を行った。

第１回目

バート・メルゲントハイム市について学び、笛吹市との交流経緯を学んだ。

第２回目

今回の視察のテーマ・キーワードである温泉療法・歴史文化・地域産業振興を基に 3 つの班に分けそれぞれ次のように課題を設けた。

１班　　三浦班（A）・・・温泉療法

２班　　土橋班（B）・・・歴史文化

３班　　根津班（C）・・・地域産業

その他、バート・メルゲントハイム市について個々に関心を持った事柄を取り上げ内容を絞り「疑問に思うこと」「知りたいこと」「聞きたいこと」「見てきたいこと」を書き出した。

第３回目

前回書きだした項目で調べ上げたことを班ごとにまとめ「分かったこと」を事前知識とし、現地では何を視察し何を深めてくるかを話し合った。

【　視察報告　】

「　温泉療法　」をテーマとして話し合ってきた三浦班の所属になった私は、前から関心のあった温泉療法による効能、特に　「心　(リラクゼーション)と　身体　(身体機能)　の健康増進について」を視察課題とした。また飲料水としての効果はどうなのかを現地で学習して帰った。残念ながら主だった統計資料は手に入らなかったが現地で実際に温泉を口に含んでみた。・・・塩分のきついものだった。

（１）温泉の泉質　・・・　ミネラル豊富な鉱泉
（２）温泉の効能　・・・　消化器系・皮膚病・関節痛・呼吸器
（３）心　(リラクゼーション)と　身体　(身体機能)

ドイツロマンチック街道沿い唯一の温泉リゾート地であり、州最大の温泉保養地である同市は、温泉を利用した健康の増進や治療分野の最先端にあり３００人の専門スタッフによるクアハウス・病院・リハビリテーション等を運営している。また、１６万平方メートルに及ぶクア公園はゆっくりとした時間を過ごしながら様々なイベントが行われる。

同市が管理する健康増進プール「ソリマ―」は増築・改修のために大掛かりな工事の最中ではあったが工事の妨げにならぬよう配慮しながらも内部を見学出来た。

ソリマ―の施設内は室内プール・屋外プール・フィンランド式サウナ・ライトと音楽で瞑想しながら入るローマ式のお風呂・低温サウナ・波プール・７０メートルに及ぶ滑り台・レクリェーションルームなどがありレクリェーションルームではマサージや美容サービスが受けられる。

過度のストレスと日々向かい合っている温泉好きな日本人にとって、このスローライフな滞在型健康増進施設は関心の高まるところだろう。

見学当日は大浴場の建設予定場所に立ち、目前に広がる最高のロケーションを前に感動して帰った。

【　おわりに　】

最後に雑感を記してこのレポート（報告書）をおわります。

このドイツ友好交流視察がこれからの笛吹市の国際交流の活性化につながる第一歩となりますようにいくつかの提案をさせていただきます。

１、　笛吹市国際交流センター(室)を適格な部署に設ける。
２、　担当ではなく専任の職員を置く。
３、　国際交流に関心のある市民に呼びかけ顔の見える国際交流センター(室)にする。
４、　市内に在住する外国人（各国ごと）の人数把握を行い、友好交流を進めるために外国人から見た笛吹市について意見を聞く。
５、　国際交流友好都市（ドイツ・フランス・中国）については交流体験者・関係者の組織づくりを行い市に還元するための意見交換を行う。
６、　友好都市（ドイツ・フランス・中国）の語学学習や笛吹市在住者との交流を持つ。
（　私的交流につながることを前提に　）
７、　東京オリンピック開催地、富士山の文化遺産登録など広告塔の力を追い風にして国外から関心を持たれるような、リピートにつながるような笛吹市国際交流運営を市民も巻き込みながら行う。

以上

この友好交流視察に参加できましたことを心から感謝申し上げます。
ツアーコンダクター・現地通訳ガイドを含め参加メンバーに恵まれ、またバート・メルゲントハイムの皆様に温かく迎えられたおかげで帰国後さらに国際交流に関心が深くなりました。改めまして皆様にダンケ。ありがとうございました。

ドイツ国際交流視察事業に参加して

神谷　梨夏

2013 年 11 月 4 日午後５時頃、長い空路を終えてフランクフルト国際空港に到着しました。そこからバスに揺られること約２時間、笛吹市の姉妹都市であるバート・メルゲントハイム市のホテルへ到着しました。ホテルの入口ではバート市の職員の方々が寒い中外で待っていて下さり、我々をあたたかい言葉で歓迎してくださいました。

日付は変わり 11 月 5 日、翌朝から早速市の視察です。前日ホテルに到着したときは暗くて街並みがあまりよく見ることができませんでしたが、明るくなってホテルの周り街町並みを見渡すと、細かい石畳の道路、黄色や赤、オレンジ色を主としたレストランやお店の建物がたくさん並んでおり、遠くを見渡すと紅葉した山や雪の積もった山があり、決して都会とは言えないけれど、とてもおしゃれで魅力的な風景が広がっていました。一番初めに、バート市の市庁舎に案内されました。市長さんのお部屋に通され、ゲストブックに署名をさせていただき、７年前に改築されたばかりの綺麗な市庁舎の紹介を受けました。その後バスで１５分ほどのところにあるソリマーという施設の建設現場に案内していただきました。バート市は温泉保養の街であり、ソリマーとは「温泉」意味する言葉です。このソリマーという施設は、山梨で言うとスパランドや塊泉のような複合型温泉施設といった感じでしょうか。数十種類ほどの室内プールや屋外プール、温水プール、サウナなどがあり、家族や友人どうしで訪れても楽しいバート市の目玉施設になるようです。来年の三月に完成を迎えるそうなので、私は来年の夏休みは海水浴でもなく東京サマーランドでもなく、バート市のソリマーに遊びに行きたいなあと感じました。

バート市は糖尿病や高血圧などの病気を診断された患者さんが、鉱泉を飲む治療をしにドイツ国じゅうから集まって来るそうです。その患者さんが療養するための保養施設の敷地はとても広く、中には芝生が広がり紅葉が美しい銀杏並木や噴水や小川、花壇などがあり、天気の良い日に景色を眺めながら散歩でもしていれば、病気なんか治ってしまいそうなくらい美しい敷地でした。ソリマーをあとにしてこの保養施設の敷地をずっと歩いていくと、やがてシュロスパークという敷地にうつり、ドイツ騎士団の駐屯地であったお城と教会を見学しました。

夜はバート市の職員の方々主催の歓迎パーティーに参加し、交流を深めました。食事をしながらバート市の市長さんや副市長さん達と食事をしながら談笑し、バート市の文化や、産業、家族のことなど、拙い英語ながら親身に聞いて

くださり、わかりやすく話していただき、本当に親切な方ばかりで感激しました。ドイツの方はドイツ語をはじめ、たいていの方は英語も難なく話せるが、いつから英語教育を始めるのですか、とお聞きしたところ、だいたい６，７歳から始めるとのことでした。それは、ヨーロッパは小さい国がたくさんあり、国ごとに言語が異なっていることが多く、なにかひとつ共通言語を設けなければ、コミュニケーションがとりづらく、国際協力できないからだとおっしゃっておりました。日本も同じ先進国として英語教育の早期化をするべきだなあと感じました。

楽しい交流会が終わり、夜はゆっくり休んでバート市の視察二日目です。この日はまず始めに、地方にあるウルト・インダストリーパークという企業を訪問し、工場を見学しました。ディズニー映画に出てきそうなとても大きな工場で、ほとんどが機械化され、とても効率の良い運営をしていることを感じました。工場内で働いている人はすべて正社員で、非正規労働者は一人もいないそうです。ドイツでは高校を卒業すると職業学校に進学する人がおり、就職前から企業に入って働かせてもらい、その職業のプロになれたころに就職する制度があるそうです。ウルト社もその制度を登用しており、質の高い労働者を雇うことで、質の良い商品を生み出すことを理念としているそうです。日本では高校、もしくは大学を卒業後すぐに就職するので、学校と社会とのギャップが深刻な問題になっています。ドイツのような職業学校の制度がもっとメジャーになれば企業側も良い人材が集められ、就職する側も事前に会社の様子がわかるので、良い制度だとかんじました。ウルト社で昼食をとったあと、バスで移動し、自然資源を使った火力発電施設の見学をし、バート市のビール工場の見学をさせていただきました。

バート市の人口は約２万２千人と笛吹市よりも５万人近く少ない小さい市なのにもかかわらず、ソリマーなどの温泉施設、火力発電施設、大規模な工場、ビール工場など、大きな施設がたくさんあることに驚きました。ここから、ドイツと日本の文化の違いだけではなく、政治の違いも学ぶことができ、視察を終え帰国した今、新たな目線から今の日本や山梨を考えることができるようになりました。また、私たちの来訪を心から歓迎していただき、交流してくれたバート市役所の皆様、並びにこのドイツ国際交流視察の企画をしていただき、貴重な体験をさせてくれた笛吹市役員の皆様に感謝申し上げたいと思います。

ドイツ騎士団とバート・メルゲントハイム市

杉田清美

ドイツ騎士団は、十字軍に起源を発する戦闘的なローマカトリック教会の公認した騎士修道会の一つで、正式名称はドイツ人聖母のマリア騎士修道会という。12 世紀後半の第 3 回十字軍の一員として、パレスチナに赴いたドイツ出身の戦士たちを保護するため、又、キリスト教徒の傷病者を救うため、ドイツ商人の発願によって天幕病院が設立されたのが起こりである。一般の修道院と組織は似ているが、騎士をも含んでいたことが特徴である。

騎士団の事業は、当初の医療から、異教徒征服に転化し、最後には国境地域を経営する近世の特許会社のような存在と成った。ドイツ騎士団の全盛期は 14 世紀で、デンマーク王から、エストラント、ノイマルク、海土のゴトランド島をも獲得した。しかしその政策と、専制的支配は、諸都市や貴族を敵とした。

15 世紀には衰退期を迎える。ポーランド王とのタンネンベルクの戦いや、ナポレオン戦争の頃、騎士団はドイツにおける所領のほとんどすべてを失う事となる。1510 年 37 代総長に選ばれたアルブレヒト・フォン・ブランデンブルクは、1523 年に同調する騎士団員と共に騎士団を離れて、マルティン・ルター派に改宗した。ドイツ騎士団と対立し、プロイセンから追い出し、カトリック教会の騎士修道国家は、歴史的な役割を終えた。その後の役割や地位は時代とともに変遷していくが、1526 年から 1809 年にかけて、騎士団の本部所在地が、この町にあった。その後 18 代にわたる騎士団長が、バート・メルゲントハイム城に居住し、町を発展させた。今、この城はドイツ騎士団の博物館と成っている。旧市庁舎前のマルクト広場の噴水に立つ像は、通称「ミルヒリンク」と呼ばれた第 39 代ヴォルフガング・シュッツバール（1543～1566 年）騎士団、団長である。強い意思で水道などを整え、町の発展に貢献し、今でも市民に英雄として慕われている。

騎士団と同じ頃に、1590 年頃から盛んに成ったバロック建築様式がある。語源は、ポルトガルの「歪んだ真珠」と言われ、自由奔放で、曲線の多い非構成的な建築や、装飾を形容するのに用いられた。又、「バロック」は建築そのものだけでなく、彫刻や絵画、文学、音楽を含めた様々な芸術活動によって空間を構成し、複雑さや多様性を示す事を特徴としている。今でも有名なのは、ドイツ騎士団の城館に、1574 年にブラジウス・ベルヴァルトが建設した「ベルヴァルト階段」と呼ばれる螺旋階段が残されている。

バート・メルゲントハイムは、第二次世界大戦中は、この町に野戦病院が置

かれており、戦禍を受けなかったそうだ。その為に、ドイツ騎士団の城館や、場内教会、旧市庁舎、ツインハウス、聖ヨハネ教会の塔など、この街の象徴的な建造物に、又、木骨作りの古い民家に様々な所で、ゴシック、ルネサンス、バロックという時代の建築の様子が多数残り、街の歴史的な姿を物語っている。

時代の流れで生活様式が変わり、不便さも感じるだろうが、何百年もの間、バート・メルゲントハイムに住む人達が、この国の伝統を守り、家を守り、人をそして町全体をも守って来た。質素ではない。環境を守るエコの生活だ。自分達も見習わなければいけないと思った。18 世紀に聖堂と城内教会の鐘が調律されドイツ騎士団総長、マクシミリアン・フランツ・フォン・エスタライヒのウィーンへの郷愁を紛らすために、シュテファン大聖堂の鐘と似たような音に成るようにしたものだそうだ。現在も土曜日の午後打ち鳴らされている。

教会の鐘が鳴り、晩秋のこもれびの中、騎士がやって来そうに、石畳の道が、私をやさしく迎えてくれた。

（このあとはレポートとして載せるものではないようだが…）

平成 15 年（2003 年）石和町から 23 人の使節団が、バート・メルゲントハイムを訪問し、交流 10 周年の記念を祝う式典が行われました。

両首長と使節団一行と、バート・メルゲントハイム市民がクア公園内に、10 本の桜の苗木の植樹を行いました。その時にも参加させて頂き、今回また参加する事が出来ました。10 年振りに見た桜は、とっても大きく成り、花の咲く季節が楽しみです。10 年前にお会いしたバート・メルゲントハイムの観光協会の役員の方々にも再会する事が出来、大変嬉しい旅と成りました。

事務局の皆様に厚く御礼を申し上げます。

友好都市交流の一員として

齊藤　文雄

はじめに

過日、バート・メルゲントハイム市への視察の一員として参加し、両市が心地よいゆったりとした「つながり」の感覚が醸成されることと思っている。

事前のグループ研修によってメンバーとともに問題点を抽出して、その解決策の作成に努めたところである。

現地での話合いで、まず感じたことは、言葉の壁があり、全て通訳の説明によるなかで我が国との温泉に対する考え方の相違であった。ドイツでは、温泉は神からの恵み（天から与えられたもの）であり、全員の共有財産であるという考え方である。一方、我が国では、温泉は私有財産であると考えていることである。私自身、不動産業者から温泉を購入する際、そのことは痛切に感じたことであった。

この考え方の相違によることからとも思われるが、ドイツでは早くから温泉療法が発達したが我が国では団体バスで専ら集団旅行遊興型の温泉利用が流行しているが、最近では我が国においても積極的な保養・健康づくり志向が高まりつつあるようだ。

ドイツ騎士団

１２世紀後半エルサレムにおいて、十字軍遠征途上の兵士たちのために、病院づくりをしたというのが起源といわれている。ドイツ騎士団の本部があるマリーエンブルク城を見学したが、百聞は一見に如かず、であった。

騎士団は、慈善団体となり、現在も存続しているということである。

温泉の歴史

我が国の温泉の数、湧出量は、世界一を誇っており、「温泉にでも行って、ゆったりと湯に浸かりたい。」と、つい口に出すなど、温泉に対して強い親近感を抱いている。

１９世紀初め、バート・メルゲントハイム市の温泉は、放牧していた羊に教えられたといわれている。我が国でも鹿に教えられた温泉があるなどドイツ同様な事由による温泉がある。

クアパークの行き届いた設備等は、更に建築中の巨大な施設もあって、日本では考えられないものであり、大いに参考にしなければならない。

最近では、休養、保養、健康づくり志向が高まり、積極的な健康づくりに励

み、生活習慣病を予防したり、ストレス状態から解放を図る等、また介護予防にも利用されている。

おわりに

　現地を訪れて、交流と理解を深めることができ、更に、友好関係を築いていきたいと考えている。

　我が国の行政機関による温泉の指導状況をみると、温泉の保護については、源泉から貯湯槽までは環境省が、衛生管理の面では厚生労働省指導するという二本立てによっている。

二本立てによる弊害も考えられるので、行政指導の改善も検討されて良いのではないかと思われる。

ドイツ国際交流視察事業報告書

土橋　園子

　このたび、友好交流視察団員の一人としてドイツ訪問の機会をいただき、参加者の一人として、ここにその報告をさせていただきます。

　今回の友好都市交流は、ドイツ・バートメンゲルトハイムとの国際交流ということで、３回の事前学習会が開催されました。
私の中でのドイツは、城・教会など中世ヨーロッパの建物が立ち並び、芸術・文化に優れた街、ビールとソーセージとパン・ポテトを好み、エコと脱原発に取り組む国、というイメージくらいしかなかったのですが、事前学習会の学びの中でドイツへの知識を深め、しっかりと事業の目的が確認され、グループワークで課題を見つけ、団員としての自覚を持つことができました。

　出発当日は朝早く、まだ薄暗い中、それぞれ家族に見送られながらバスに乗り成田へ、そして一路フランクフルトへ・・・。
　フランクフルトの空港で早速驚いたことは、街の暗さでした。建物の灯りだけで、街灯はほとんどない。私たちを乗せたバスの車内も電気はつけずヘッドライトのみで、どこをどう走っているのか全く見当がつかない。時々まとまって見える灯りは、ちいさな町の家々の窓。（なんとエコなのだろう）そんな想いで１時間半ほどバスに揺られ、ホテルに到着。
　バート・メンゲルトハイム市の市長様・副市長様はじめ、国際交流協会事務局の方々など多くの皆様が、寒い中、ホテルの玄関先に並んで「こんばんは」と日本語で出迎えてくださいました。本当に心が温まったひとときでした。
その温かさは翌日の市役所での歓迎会および市民課の見学会、そして、夕食の歓迎レセプションの時も同様で、ニコニコと気軽にお声をかけて下さり、一緒に写真撮影に応じて下さるなど、明るくフレンドリーな市長様・副市長様と職員、ご出席くださった皆様方で、以前から知り合いだったように親しく交流できました。
市内を歩いてみると、前日には暗くてわからなかった笛吹市の旗が至る所に掲げられ、私たちを歓迎して下さっていたことに感激しました。
　二日目の歓迎レセプション、三日目のさよならパーティーでは、語り合い、折り紙・歌などによる文化交流で親交を深めました。
特に、私たちが準備していったドイツの詩人であるゲーテの「野ばら」をドイツ語で合唱すると、大いに喜んでくださり、即興でお返しの合唱をして下さいました。明るく朗らかで誠実なドイツ人のお心に触れたひとときでした。そして、このような交流ができ

たことで、目的のひとつが達成できたのではと感じました。

　また、笛吹市との共通点である温泉施設の見学では、驚きいっぱいで説明に聞き入ってしまいました。
　というのも、人口２万３千人足らずの市で、施設の規模も費用も膨大なソリマーの改修工事が行われていたからです。
　しかし、説明を受ける中で、未来に向かって希望を持って前向きに事業に取り組む姿勢に感動いたしました。そこは、明るく朗らかな国民性というものだけではなく、これまでの実績としっかりとした裏付けがあるのだろうと感じました。
　それは、1970 年代に建設されたその施設は、1981 年には年間 30 万人の利用者を有したこと。ドイツの国民病として糖尿病があげられ、療養としての保養所の利用は、医師の許可が必要であるが保険費用の対象となること。世界に名高い温泉保養地として国内のみでなく、ヨーロッパ全土および世界各地から保養客・観光客が訪れることなどがあげられました。
実際、2012 年の年間宿泊者数は 70 万人、1 日の滞在者数は 120 万人にも上り、州・郡・市あわせて年間 900～1000 の催しを開催しているというのだから、年間売り上げに 9.5million ユーロを予定する計画も理解できる思いです。
　そして、ソリマーには宿泊施設を持たず、市内のホテルを利用しながら長期・短期の療養・保養を行うことは、町の活性化にも繋がっていくようにも思えました。
　そのように考えると、笛吹市の活性化にもまだまだ考えるヒントがありそうな気持ちになりました。
1826 年に羊飼いによって発見されたクア公園内の鉱泉は、笛吹市のアルカリ性単純泉とは泉質が異なり、ナトリュウム・塩素・硫黄を含む鉱泉で、ミネラルウォーターや温泉浴療法として市の大きな財産となっているとのことです。
クア公園内には、遠くへ行けない方や療養者のためのお店もあり、バート・メンゲルトハイム市と石和町時代の友好の証である石灯篭と桜の木が、しっかりと根付き、大きく育っていました。
　また、バート・メンゲルトハイムはドイツ騎士団の拠点となっていたため、800 年の歴史の重みを感じられる城館が公園内にあり、ハプスブルグ家に由来する金の十字架が刻まれていました。壁には時の流れを象徴するように増築の跡がくっきりと残り、城内の螺旋階段の天井の太陽と、シュテファン寺院のように鳴り響く鐘の音が印象的でした。
騎士団の城の外は、15 世紀の建物が立ち並ぶマルクト広場へつながる直線のブルク通りで、若かりし（21 歳）ベートーベンが、楽団を引き連れて 3 ヶ月間滞在したことを物語る画像や、ドイツ騎士団団長ミルヒリングの像が立つ噴水があり、時間を超え、出会うことのない世界の音楽家・芸術家と同じ場所に立てた自分に興奮し、あらためてドイツという国の歴史に思いを馳せました。そして、歴史がそのまま残る街とそこに生活

する人々の想いを感じ、尊敬の気持ちが生まれました。

　ウルト・インダストリーパークでは、ウルト社の歴史や理念、会社の内容について学び、施設を見学しました。
　1945 年小さなネジ屋誕生から半世紀、ドイツ軍の基地を買い取り、世界中で 66000 人が従事する大企業に成長しているトップのお話は、とても魅力的でした。
その中でとても印象深く感じられたのは、人としての想いをそのまま会社経営に反映しているところでした。
　「常に将来を考える中で、将来があるということは過去がある。現在、会社が存在する歴史を知ることは大切である。ただ商品を売るだけでなく、顧客には歴史を知ってもらう。軍のカルチャーも大事、過去の歴史を知ることは大切」という想いで展示されている敷地内の博物館を私たちも見学させていただきました。このような想いの方々によって、ドイツには歴史的建造物が多く残されているのかと、ふと考え込んでしまいました。
「スポーツは競技、企業も勝負の世界、だからスポーツ関係のスポンサーとしてバックアップしている。文化・芸術にも力を注ぎ、12 の美術館で 1 万点のコレクションを無料で一般公開している。何よりも、企業としてもトップであり、社員の資質もトップである」ことをめざす中で、社内・顧客にも感謝の気持ち「ありがとう」を忘れないとお話し下さいました。
　社員の資質については、ドイツの二次元システムという方針で 3 年間の教育期間があり、学校で理論、民間企業で実習する制度が設けられており、現在、各学年 60 名づつ 180 名の受け入れをしており、非正規雇用や外国人雇用による人件費削減・コスト抑制は考えず、それ以上に信頼できる商品と人材、最善を考え労働者の質を考えることに終始している。そのため、毎日通う従業員も、自分が必要とされているという自負がある。
というお話に少し前の日本の姿を想い、感銘を受けました。
会社の理念として、一つのネジであってもそれが不足することの大変さから、「必要なものを、必要な数、必要な時に届ける」ことができる会社であり、商品を運搬することで、セキュリティーも運搬するというコンセプトをお持ちだと伺うことができました。
　一個人の私ですが、ここでの学習は今後何をするときでも、考え方の基本となるように思いました。そして、会長の「ウルト社にお金をいただいているのではなく、顧客にいただいている」という言葉に、とても感動いたしました。

　自然火力発電所見学では、まだ、活動開始から 1 年目という施設でしたが、日本の 3・11 により自然エネルギーへの考えが高まり、2012 年 1 月から建設工事開始し、1 年で完成というハイスピードの取り組みに驚かされました。
地元の資源（森林・街路樹・産廃）を利用し、地元へ売電、灰は農業用に利用。二酸化

炭素の削減にも努力し、自動操縦により夜間・休日は自宅でコンピューター管理ができるシステムになっているとの説明でしたが、ドイツ国内を旅してみると、行く先々で風力発電の装置が目に留まり、自然エネルギーへの関心が高いことを強く感じました。

ヘルプストヘウイサーという 430 年ほども歴史のあるビール製造工場では、ビール生産過程のお話を伺いながら工場内を案内していただきましたが、ビール酵母の発酵する匂いに圧倒されてしまいました。ドイツでは、ビールやワインの工場は各地にあり、特に、ビールは消費期限が 6 カ月と短いため、見学先のビール工場では、30km 四方以内の地域が販売流通範囲とのことでした。また、ドイツでは、「毎日、男は１ℓ・女は0.5ℓのビールを飲むのが健康である」と言われていると笑顔で話してくださいました。

ワイン工場では、5 種類のワインの試飲をしましたが、ドイツではミネラルウォーターもそうであるように、炭酸性のものが多く、アルコールに弱い私でも山梨（笛吹）産のワインの方が口に合うような気がして、山梨のワインは、販売ルートを全世界に拡大しても十分受け入れられるのではないかと思いました。

姉妹都市バート・メンゲルトハイムでは、交流の他、以上のように歴史・産業など地域の様子を学びましたが、ドイツには必見すべきたくさんの建造物、歴史的遺産があります。
笛吹市とは姉妹都市になっていませんが、温泉保養地であるバーデンバーデンの温泉施設や世界的に有名な建造物のノイシュヴァンシュタイン城・ロココ様式の世界で最も美しいといわれる世界遺産のヴィース教会・FC バイエルン・ミュンヘンの本拠地であるアリアンツ・アレーナなどを見学し、視野を広められたことは自分自身の財産であり、今後、日本の文化や作法を伝えていくという私の仕事や、日本語ボランティアとしての活動の中で、きっと何かの役に立つことを確信しています。

今回の国際交流事業では、バート・メンゲルトハイム市が姉妹都市ということでバート・メンゲルトハイム市とその周辺の地域・歴史・産業について学び、人々との交流を深めましたが、今後は、さらに地元の歴史・産業への知識を深め、地域を知ることから始め、どのような町を目指すのか、何ができ何ができないのか見極め、ひとりひとりが生き生きとそして、自信と誇りを持って語れるような笛吹市を造り上げていくための一端として活動することが、参加者としての責務と考え大変重く受け止めておりますが、今回このような機会を頂けたことに、とても感謝いたしております。
ありがとうございました。

バート　メルゲントハイム市友好交流視察レポート

古屋敦子

１　はじめに

温泉保養施設を有するバート　メルゲントハイム市が、その施設をどのように利用、運営しているのか。 ガイドブック等で見るメルヘンチックな古い建物で、人々がどのように生活しているのかを知りたいと思った。

２　視察

①　ソリマーという複合温泉施設の工事現場、クアパークの見学

ドイツにおいて、温泉利用は2～3週間滞在するという医療としての側面もあるので、利用にあたっては4年に1度健康保険が利くのだという。 療養地なので温泉施設だけでなく、公園も良く整備されていた。 ソリマーにはいくつもの浴場、数種類のサウナ、 大小のプール、トリンクハレという飲泉場等があり、随分大規模な施設をつくっていた。 もとは保養事務局が工事をしていたのだが企業の倒産等があり、今はバート　メルゲントハイム市が建物の健全化ということで工事を行っている。

②　自然材料を使った火力発電所の見学

森等の剪定木や廃木を市が買い取り、チップにして乾燥させたものを燃やすことによって電気を造る。 発電の際に発生する熱を無駄にせず、公共施設や約2000世帯分の暖房用の熱水をつくっている。 熱水は上水道、下水道、電気、ガス等と一緒に地下のパイプラインで各施設、各家庭に届けられている。 今年操業を始めたのだが、建物やインフラは40年使用することを予定しており、内部の設備については技術の進歩に合わせて10～12年を目途に新しくするという。

上記2つとも、今のところ市の事業として行っている。 なぜ人口2.2万人余りの小さな市でこのような大規模な事業が出来るのか。 消費税が19％（食料品は7％）であるというのも原動力になっているのではないかと思う。

10年単位で先を見据えた税金の使い方、1つの事業を行うことにより、2つも3つもの効果を得ようとするドイツ人の合理的な考え方が印象的である。

ドイツの地方都市の街並みは絵本のように美しい。市庁舎等の公共施設のみならず、一般の家庭も古い建物（バロック時代のものも）をいまだに使っている。ドイツを訪れるまでは、古い建物を使い続けるのは使い勝手が悪いだろうと思っていたが、内部を近代的にリフォームしながら快適に暮らしているようである。

3　提言

さて、翻って笛吹市について考えてみる。

石和温泉駅を整備するとのことであるが、笛吹市の名前の由来となった笛吹権三郎のからくり人形かモニュメントを作って、定時になると笛の音が聞こえてくるといったものを設置するのはどうだろうか。 ミュンヘンやローテンブルクでからくり人形を楽しみにしている観光客や市民を見た。 また、以前行った岩手県花巻駅前に宮澤賢治に由来するものがあった。

次に、街並みの統一感を出せないものかと思う。 笛吹市では、標識を統一する事を考えているようであるが良いことである。 時間はかかるだろうが、身延駅前のように、特に石和温泉駅前をすっきりと統一感をもったものにできると良いと思う。

4　まとめ

バート　メルゲントハイム市の市長さんが挨拶の中で 「ここの市民はバート　メルゲントハイム市を愛しています。」 とおっしゃった事が印象にのこっている。 日本人は 「愛する」 という言葉を普段あまり使わないが、「好き」 という言葉に置き換えてみて、私達はどうだろうか。 私達が笛吹市を好きになるためには、行政に対して関心を持ち、提言していく事が大事だと思う。

ドイツ国際交流視察事業を終えて

市川　沙絵

今回、使節団としてこの事業に参加させていただいたことは、自分の中で大変貴重な経験となった。多くのことを吸収し、学び、また感動した、密度の濃い１週間だった。

初めの４日間は、笛吹市との姉妹都市であるバート・メルゲントハイム市で交流・視察を行った。初めは少し不安もあったのだが、実際にホテルに着くと、バート・メルゲントハイム市の方々がとても温かく迎えてくださった。

翌日からは視察が始まり、まずは市役所を見学した。ここは新庁舎であり、観光課以外の業務は全て入っているということだった。ここでは、約 100 人の職員が働いているという。市のゲストブックにサインもさせていただいた。次に、現在建設中の温泉保養施設であるソリマーの工事現場と、クアパークを見学した。ソリマーはとても広く、サウナや冷水浴場、レストラン、80m ほどの滑り台など様々な設備を予定しており、3 月に完成予定ということである。以前は市と郡、州が経営に関わっていたが、今は市だけで賄っているという話を伺った。市が企業に経営を委託し、企業が経営を行うそうである。とても広大な施設で、完成した姿をぜひ見てみたいと思った。昼食後、ドイツ騎士団の城や市内を見学したが、事前の研修でバロック時代の様子をとどめた建築物が多いと学んでいた通りで、旧市役所も観光課が置かれる場として今も使われているということだった。夜にはバート・メルゲントハイム市主催の歓迎レセプションが行われ、言語の壁が邪魔をしてコミュニケーションをとることができるのかという不安があったが、とても楽しいひとときを過ごすことができた。会話はほぼ英語でなされ、ときどきドイツ語や日本語を交えて苦戦しながらも、話そうという意欲があれば、理解してもらうことができるということがわかった。日本から持って行ったお土産の絵葉書を渡したり、折り紙で鶴を折ったりしたこともコミュニケーションの１つとなった。バート・メルゲントハイム市の方からもたくさんの頂きものがあり、大変良い思い出の品となった。

翌日はまず、ヴルト・インダストリーパークに行き、説明を受けたり工場内を見学したりした。この会社は 417 社が同じ傘下にあり、そのうち７７社がドイツの会社、その他３４０社は世界中に分散しているという。日本にも横浜に WURTH JAPAN というものが有ると聞いて驚いた。説明は難しい内容もふくまれていて、全てを理解することはできなかったが、日本との違いなど様々な面が見られ、興味深いものであった。特に、「常に“Danke”の気持ちを大切に」というのをモットーにしている、ということや、過去をとても大事にしているところなどが素晴らしいところだと感じた。これはこの企業に限ったことではなく、ドイツ全体に広まる考え方なのだろうと、全日程を通じて感じた。ドイツは時代の最先端技術をたくさん取り入れているけれども、それと同時に古いものもとても大事にしているのだということが、建築物などいたるところで感じられた。ヴルト・インダストリーパーク内で食事をとった後、発電所に行った。ここは自然の材料を使って発電しているということで、

バスから降りた瞬間に木くずが発酵している不思議な匂いがした。中では、実際に高温で材料を熱している様子を見たり、施設や家庭への供給についての説明を受けたりした。東日本大震災以降、日本をはじめとして世界中で原子力発電について大きな問題となっているが、このような発電所であれば安全であり、かつ環境に与えるダメージも軽減されると思う。発電所の後には、ビールの製造工場に向かった。ここでも、まずは臭覚からビール工場であることを感じることができた。見学をしながら説明を受けたが、ビールが出来上がるまでには思っていたよりもすごく時間がかかるということがわかった。無駄なものが何も入っていない、手間と時間がかけられたビールはきっと日本のものとは異なる味わいがあるのだろうと思う。残念ながら私はお酒が好きではないので、ここで帰りに頂いたビールはお土産として家族に渡した。この後ホテルに戻り、夜は笛吹市主催のさようならパーティーが行われた。つたない英語ではあったが、前日の歓迎パーティーとは別の方ともいろいろと話ができ、有意義な時間を過ごすことができた。また、笛吹市主催ということで、私はピアノの演奏をさせていただいた。一緒に行った神谷さんと、日本の代表アニメであるとなりのトトロから 2 曲を連弾で演奏し、ソロでは、ドイツ出身の作曲家であり、ドイツ騎士団にゆかりのあるベートーベンの「エリーゼのために」と、同じくドイツ出身のシューマンが作曲した「トロイメライ」を弾かせていただいた。自分の勉強しているものを本場で演奏するという機会を与えていただいたことは、とても光栄なことだった。バート・メルゲントハイム市の方々にも大変喜んでいただき、本当に嬉しかった。また、私の伴奏で笛吹市から「赤とんぼ」、「上を向いて歩こう」、ドイツリートの「野ばら」の歌を送り、こちらも大変喜んでいただいた。そしてバート・メルゲントハイム市からも歌のプレゼントがあり、本当に音楽には国境がないということを改めて感じた時間となった。

次の日は、ワイン醸造所に向かった。ここでは 5 種類のワインを試飲した。それぞれに特徴があり、1 つずつ説明を聞きながら試飲した。その中で、ドイツのワインはいくつもの階級に分かれており、きちんと表示しなければいけないということがわかった。ぶどうの種類も豊富で、街近郊では 21 種類のぶどうが栽培されているという。農薬も使っていないということで、品質が良く、お酒が苦手な私でも香りの良さはとてもよく感じることができた。ワイン醸造所でバート・メルゲントハイムでの滞在は終了し、その後はローテンブルグ、バーデンバーデン、フュッセン、ミュンヘン等に行って、多くの名所に行くことができた。

この事業を通し、全てが新鮮で勉強になったが、何よりもたくさんの人とのつながりを持てたことが 1 番の収穫となった。バート・メルゲントハイム市の方は温かく、皆さんに良くしていただいたので、1 度きりの縁ではなく、今後にもつなげていけたらいいと思う。また、日本から一緒に行った笛吹市の方々とも、旅の中で交流を深められたことは自分にとって嬉しいことである。普段なかなか関わることの少ない世代の方々ともお話しすることができ、学ぶことはたくさんあった。ぜひまたこのような国際交流のできる機会をたくさん設けていただき、多くの市民の方にこの経験を味わっていただけたらいいと思う。

ドイツ友好交流視察研修会に参加して

加藤　芳宏

　ドイツ、バート・メルゲントハイム視察に参加し、私にとっては新しい１ページとなりました。
　今回の旅行で直接観光業に携わる私にとっては笛吹市と比較することが多く、笛吹市がいかにして観光立市（果実と温泉の街）として生き残れるかを常に頭の中にありました。
　まず行政が、市民が観光に対して、どんな感じ方をしているかが興味がありました。
バートの市民が古いものを大事にしている事、又、ボルト社で体験した様に観光に直接関係してない業者の方が歴史文化を大事にしている事です。そんな人々の表れとして落ち葉は落ちているが、日本で見られるゴミがない事です。
　住民が皆、誇りを持ち観光客に来てもらう事に力を注いでいることが伺える事です。
　次に観光客の数で言うとバート・メルゲントハイム、ローテンブルク、二つの観光地の宿泊客は６０万人前後、又、日帰り客の数は２００万人前後と聞きました。
　私達の笛吹市も宿泊客は６０万人～１００万人、日帰り客は２００万人前後と思います。
　そんな状況の中、あの様に美しく大きな施設を持ち、古い物を大事にして維持している事に対して敬意を表し賞賛した。
　両、観光地を維持している財源はバート・メルゲントハイムは保険税（300～400 円程度）ロｘーテンブルクは観光税（400～500 円程度）と聞きました。
　この財源を全て観光の為、又、公園維持の為に使用していると話していました。
　その程度の財源で、あの様に美しい観光地が維持できるとは驚きました。
　私達、笛吹市も、もっともっと努力しなければと気持ちを新たにしました。
　お金の価値観が違うにしろ、あの様に世界的有名な観光地の維持に対して改めて感激しました。
　笛吹市の人々は何が有名かと聞かれると、果実と温泉の街と良く聞きます。
　しかし、来て下さる観光客の目で見ると、どうだろうか？？市民一人一人が笛吹市のビジョンを夢見て１０年先、２０年先その夢に向かって果実と温泉の街、又、若者の住みたい働きたい街として努力しようではありませんか？？

ドイツ友好交流視察研修会に参加して

加藤　美江

バート・メルゲントハイム市と姉妹都市として友好交流を結んで22年程の年月がたっていると言うことを知り正直、驚きました。

ドイツの都市と友好の絆を結び交流を重ねてきたと、おぼろげには知っておりましたがあまり興味も持ちませんでした。それゆえ、今までに関わって来た人達に敬意と感謝の気持ちを贈りたいと思います。

バート・メルゲントハイム市も笛吹市と共通した点がいくつかあると感じました。鉱泉を利用したクアハウス、長期滞在型、広大な公園、リサイクルセンターの活用、それらをかかげ健康の街、雇用促進の街と唄っています。

まず健康に関してはクアハウスの充実化、周りには大きな公園となっており散歩などのプログラムがされていました。日本の人達と違って休日は長く、したがって利用も一週間から一カ月とか身体ばかりではなく気持ち的にもリラックスすることだと思いました。

このクアハウスに関わって働いている人は約3,800人、バート・メルゲントハイム市は人口約22,300人、その内働いている人が約11,000人、クア施設関係全体で 16.5%位、雇用推進と見学させていただいた一社、市内にあるヴォルト社について約1,200人の人が働いていると言う事です。

広大な敷地にあり、整備された工場内、社長、みずからの説明（勉強会）の案内をして下さいました。製品はボルト、ネジ関係で10万点を数えるそうです。

社内にはドイツの歴史がわかるミニ博物館的な場所も作られており、時代により日本で言う鎧兜などが陳列してあり、十字軍よりの歴史がより分るようになっておりました。又、社員食堂も考えて造ってあり、私達も社員の方と同じ食事（ビュッフェ式）をいただきました。他にもバート・メルゲントハイム市の方々のおもてなし、市の入口より街中が（市役所等）、笛吹市の旗が飾ってありました。

街は静かで、とても綺麗です。時期により落ち葉がすごかったけれどゴミは目につきません。

笛吹市も温泉と果実の街を唄っております。温泉と鉱泉の違いが施設をどうするか…と言う事も早急には無理な所だと思いますが、せめて広い公園なり他県より来られた観光客に散歩をして木々をめで、お昼など食べられたらと思います。

スコレーセンター、小林公園、石和温泉駅西側に公園等はありますがバート・

メルゲントハイム市の様に木があまりにも少ない気がします。木々が多ければ、それにより葉も落ちて、片付けが大変になり費用がかかり、いろいろと問題は出てくるでしょう。

費用の捻出は公園利用者から金額を頂くとか・・・

バート・メルゲントハイム市のクアハウス利用者はこちらで言う入湯税と同じ保険税がかかりますが、それを公園の維持費等に充当しているそうです。細かい事は私には分りませんが広い公園があり地元の人も観光客の人達もゆっくり出来たら良いな～と考えました。

雇用については景気が少しずつ昇りつつあると言われますが私共が経営しておりますホテル業は厳しく、市内にある企業はどの様なのかが分かりません。

けれど、あのヴォルト社の様な大手企業が笛吹市に出てくれたらいいのに…と思いました。

友好姉妹都市として思いますのは自然がいっぱいあり、少し盆地的な気候では・・・？

ワイン造りが栄えており、もちろん、ぶどう畑も沢山ありました。世界に知られた古き良き街、ロマン街道沿いに位置し景観に恵まれた街でした。

笛吹市も同じです。甲州街道を抜け中山道や長野方面へつなげて行き、甲州ワイン、石和温泉の名を世界へ広めて行きたいですね。

ドイツ友好交流視察事業に参加して

雨　宮　美　枝　子

この度はからずも、ドイツのバート・メルゲントハイム市への友好交流視察事業に参加する機会を得ました。

恥ずかしいながら、旧石和町とバート・メルゲントハイム市が、友好姉妹都市関係にあることを知りませんでした。事前研修３回と市からいただいた「友好交流１５周年記念誌」を何回も読み、両市が、平成３年５月に友好交流協定を結び、２０数回にわたる視察団の相互訪問、研修生の受け入れなどの事業を行い交流と理解を深めてきたこと。そして、それが旧石和町から笛吹市へと引き継がれたことを知りました。

旧石和町とバート・メルゲントハイム市、両市とも人口２万人ちょっと、温泉とワイン、経済・産業、観光地、文化、伝統と独自の歴史など共通点を持っていることなどから友好関係を締結したことも解りました。

国際友好交流事業には、石和温泉郷の展望と併せ、次のような目的があったことも知りました。

① 国際的に通用するまちづくり感覚を町民が身につける必要性。

② 外国からの観光客受け入れを、山梨県の中心地「果実と温泉の郷石和」がひきうけなければならないこと。

③ 外国事情を知るためには、国外に拠り所となる交流拠点が必要なこと。

これらをさらに継続して深めようと合併後、平成１９年笛吹市から友好使節団がバート・メルゲントハイム市を公式訪問、平成２１年向こうから使節団が公式訪問され、両市のつながりはさらに深まり、今回の友好交流視察事業になりました。

現地に行ってみて、石原町長の肖像画が観光インフォメーションセンターに飾られていたり、笛吹市の諸行事の写真３０枚くらいが同じセンターの壁にずらり貼られていたり、日本語の文字や言葉があちこちに書いてあり、日本にいるような錯覚を覚えました。平成７年にクア公園内に造園した日本庭園は一層存在感を増していたし、平成１５年に交流１０周年記念で植樹された１０本の桜の木も順調に太く成長していた。そして、何より驚いたことは、あちこちの道路標識に笛吹市のマークが入っていたことでした。改めて両市の友好の深さと歴史の長さを痛感した次第です。

さて、バート・メルゲントハイム市、市役所の市民課の見学。市民が気軽に来られるように、机などゆったり置いてあり、ごちゃごちゃしていなく、整然としていた。市民がどこの受付に行けばよいのか迷うことはないだろう。子供の遊び場が用意されており、母親たちが用事を済ますまで遊んでいられるようになっていた。遊び場は大々的なものではなく、３坪ぐらいでちょっとしたおもちゃがおいてあったにすぎない。

同市はドイツで有名なロマンチック街道唯一の温泉保養地であるが、１８２６年、ある羊飼いが偶然に鉱泉（ヴィルヘルム泉でミネラル分が多い）を発見して以来、世界的に有名な温泉と医療の街になった。その後カール泉（ナトリウム・塩素・硫黄を含む）・アルバート泉（ナトリウム・塩素・硫黄を含む）・パウル泉（ナトリウム・塩素を含む）が発見さ

れ、広い公園（クア公園といい１６万平方メートルの広さ、ドイツの最も美しい公園１０カ所の一つに選ばれている）には、飲泉場やクア施設（保養・治療）、フットネス、ヨガができる場所やカフェなどが揃い、ソリマー（健康増進プール）もある。残念ながらソリマーはリフォーム中で工事現場の見学と説明であったが、広い敷地の中に温泉プール、サウナ、ローマ式風呂（色が変わるライトと音楽で瞑想が出来る）、蒸し風呂（皮膚と呼吸器官のリフレシュ）、波プール、レクレーションルーム、マッサージルーム、美容ルーム等の設備があり、時代の先端を行くヘルスセンターであった。あちこちに木材がいっぱい使われ木の匂いが印象的であった。

四つの鉱泉は、消化器系の疾患・運動器官の疾患・皮膚病・関節痛・糖尿病等に治療効果があり、特に糖尿病クリニックは国際的な名声を受けているという。四つの鉱泉の効用に医学分野の高度な専門知識を有機的に作用させ、世界に誇る温泉保養地になっている。

笛吹市には、石和、春日居と２つの温泉郷があり、神経痛や打ち身、慢性消化器疾患、冷え性に効能がある。１９８９年１１月に団長としてバート・メルゲントハイム市を訪問された故天野建石和町長さんは、美しい街並みに深く感銘を受け、クアハウス、クワ公園に多くを学び、自分の病院に隣接して健康増進施設「クワハウス・石和」を建設されたという。これが今も多くの人々の健康を支えている。

次に、自然の材料を使っての発電所（バイオマスター）の見学がとても参考になった。雑木や雑草（山の木が半分以上を占めているとのこと）を細かくチップ化したものを発電に使うという。我が家では、毎年秋になるとそれと同じものを堆肥として買い、桃と葡萄畑に播く。いつも見慣れていたチップで発電出来ること、発電の過程で、熱湯が作られ各家庭に送られること、最後の灰が肥料となること等を学んだ。

ドイツでは、日本の３・１１以後発電の考え方が変化してきていて、このような施設が生まれてきているという。この施設も今年から営業を始めたばかりだそうだ。

エネルギー政策を考える上で、原発をどうするのか、地球の温暖化をどうするのか切り離すことはできない。私達が視察中に台風３０号に襲われ、多くの死傷者や建物等の被害を受け生活の場を失ったフィリピンの人々、これも地球の温暖化が影響しているという。

笛吹市は、桃・葡萄・柿等の果樹地帯だ。秋になればそれらの剪定した木が山ほど出る。そして、あちこちの畑で燃やす風景が当たり前になっている。(剪定した枝は燃やすこと可)相当の無駄をしているし、地球の温暖化にも力を貸していることになる。剪定した木々を有効に使うことを検討することが必要だと思う。どのような施設をどのように作ればよいのか、費用と収益の問題もあるし、色々問題もあるだろうが、でも検討するメリットはあるのではないか。

次に、バート・メルゲントハイム市のワインづくりについて。
同市は、森や牧草地に囲まれた丘陵地に位置する自然豊かな街である。その中のタウバー渓谷の丘陵地で栽培されている葡萄で作るワインの生産、１２００年以上の伝統がある。タウバー渓谷は貝殻石灰岩の土壌でミネラル分を多く含み葡萄の栽培に適している。伝統とあいまって高品質の赤白ワインを生産している。

視察したベックシュタインワイン醸造所は、２１種類の葡萄から２１種類の赤と白のワインを生産。葡萄栽培農家が集まっての協同組合方式である。長い伝統からか、ワインの

生産も販売も自信に満ちており、郷土料理にも消費され、しっかりとこの地域の産業として根付いるように思えた。丘陵地に広がっていた葡萄畑の紅葉の美しさも最高だった。

我が家でもワイン用の甲州ブドウを栽培しているが、生産したものを全部買ってもらえるだろうかという不安が何時も付きまといながらの栽培である。私が住んでいる地域の葡萄づくりは生食用が中心の栽培であるから仕方ないのかもしれない。そして、農業を継いでくれる後継者の育成も心配だ。

最後に、ウルト産業サービス社を見学して説明を受けた中で、印象に残っていることを書きたい。ネジ等の小型部品、装置の架設用品、メンテナンス用品等を工業分野へ販売する会社です。流通と在庫管理およびコンピューターによる商品棚管理システムによって、お客さんが購入するコストをより低く抑え、「ジャストインタイム供給方式」によってお客さんが生産効率を上げられるシステムに驚きました。

この会社の中には博物館がある。どのような道のりがあって現在があるのか、歴史の流れがとても大事。過去の歴史も顧客に届けたいというのがその理由のようです。博物館には毎日多くの見学者が来ているということでした。

人材養成ですが、「労働の質をおとさないこと」、従業員が「自分が必要とされている」という誇りをいつも持っていられるようにすること。「コストを抑えるより生産性を高めること」を目標にしていて、「非正規雇用なんて考えていない」ということでした。

会社全体の目標は「少しでも毎日成長する」「今あるものをさらにいいものに」（改善）ということでした。この目標は、私達の日々の生活にも、笛吹市のこれからにも目標にしたいものです。

今回のドイツ、バート・メルゲントハイム市への友好交流視察事業、長い間築いてきた両市の友好関係の歴史にもう一枚の歴史を付け加えることが出来たと確信している。これからも双方の市民の交流を一層深め、さらに異なる文化を持つ両市の交流が世界平和の貢献に繋がっていくことを願っている。今回見聞してきたことや体験してきたことを、自分の生活にも、私の周りにいる人達にも、私が関係している団体にも、地域づくりにも役立てていきたいと思っている。

笛吹市ドイツ国際交流視察事業報告書

石川　友子

11 月 4 日、視察団 21 名は 16 時 40 分(現地時間）フランクフルト空港に降り立った。ここからバスで 2 時間程かけて交流都市、バート・メルゲントハイム市に向かった。外は既に薄暗くなり始めていた。アウトバーンと呼ばれる高速道路は、外灯は一切点いておらず、店か家がなければ真っ暗であった。3 年前の日本の計画停電を思い出させる光景であった。

ドイツでは、日本の原発事故後、「脱原発の宣言をした」と伝えられた。アウトバーンの暗闇もその影響であると推測出来た。

ドイツでは、2002 年のエネルギー法改正で始まった脱原発政策を早めることにした。当初は 2022 年頃までに、すべての原発を停止する予定だったが、福島の事故を受けて、2020 年までに完全にすべての原発を停止する法律を作ったのだ。

原発に変わる再生可能エネルギーとして、風力発電、火力発電等のエネルギーに対して関心が高まっており、色々なエネルギーが開発されている。しかし、まだ 1 年中安定した供給が出来るエネルギーは作られていない。

だが、バート・メルゲントハイム市内に、実際に電力を供給している火力発電所があり、11 月 6 日ここの視察を行った。

ここはガメルエンジニアリング社といい、「地域の自然を使用して明日のエネルギーを」と発電している。市の協力を受けて、2012 年～2013 年の工事期間を経て今年 4 月に開設されたばかりである。バート・メルゲントハイム市の木材が発電の原料となっている。

景観を損なわないよう、道路の緑がなくならないようケアしながら林業地域から伐採を行っている。また一般家庭より出る木も原料の一部を占めている。毎年 15,400 トン、1 日大型トラック 3～5 台の木材が粉砕され発電所に運び込まれる。このチップの量が現在供給している電力を発電するためには必要なのだ。

市は電力を 1kW 当たり 25 セント（約 34 円）で買取り、学校、病院、市役所などの公共

機関の他、2000 世帯の一般家庭への給湯（90℃スチーム暖房用）3,5000kw と電力6,000,000kw の提供を行なっている。これらは地下のパイプラインで結ばれている。

日本の電気料金と比較してみると、ほぼ同じか若干ドイツのほうが高めである。（料金の計算方法はドイツ独自の制度がある）

ドイツでこのような火力発電所のシステムは、まだ普及していないのが現状であり、バート・メルゲントハイム市は先駆的な立場にある。

CO2 も 13,500 トン削減し、排気ガスも 98%濾過している。自分の地域の資源で発電し、自分の地域で使用する。理想的なすばらしいシステムだと思う。

但し、1,500 ミリオンユーロ（15 億円）の投資に対してどのくらいの利益が出るかはまだ、始まったばかりなので今後によるとのことであった。日本も電力会社が再生可能エネルギーを買取る「固定価格買取制度」で太陽光発電事業を計画する事業者がふえている。しかし国から設備の認定を受けながら、稼動を始めないケースが相次いでいるという。

様々な課題が残される。当市でも、これらをクリアーし地域で使用する電力を、地域で発電する事業が必要な時期が来るかもしれない。

もうひとつ興味を持ったことは、11 月 5 日視察のクア施設である。

ここは、バート・メルゲントハイム市役所よりほど近い温泉保養地であり、年間宿泊者数 70 万件、日帰り利用者 120 万件あり、特別クリニック 6 軒、専門(糖尿病、拒食症)クリニック 10 軒があり、湧き出る鉱泉(ミネラル成分を含む)を飲む療法を行なっている。塩分の濃度が少しずつ違う鉱泉を保養医師より処方されて飲むのだ。

保養医師の存在、飲む療法が医療保険の適用となっていることは、日本にはない珍しい療法だと思った。私たちも実際に飲んで体験したが、塩辛くてとても飲めない濃度の鉱泉もあった。この保養地では効果があると多くの患者が訪れているということだった。もちろん自費で来る人も多くいるとのことだ。

また、クア(療養温泉)は政府からの認可が必要で飲む療法のほかに、泥沼療法、海風潮風療法などもあり珍しい療法があるものだと驚いた。

ここに来る人は、宿泊者ひとり２ユーロの保養税を徴収される。日本にも入湯税があるが、内容が異なる。

ドイツの国民病である糖尿病は予防医療が必要と、この地でセミナーや講習があり、オペラや、音楽演奏会が開催されている。自然が多いため眼で見て楽しんだりする人が訪れる。ここは公園になっており、日本庭園もある。素晴らしい景観で心身ともに癒され、利用客の心情が窺がえる。

日本でも生活習慣病等の予防医療には力を注いでいるが、大きな効果がすぐには出ないのが実情である。少しずつ自己意識を高めることが必要だと思う。

この視察に参加して感じたことは、言葉が通じていればもっと交流が深まったのではないかということだ。

今後、笛吹市民は、外国人に挨拶をしたり、道を教えたり、名所を伝えたり出来るような英語力がほしいと思う。

市では今以上に、気軽に英語に触れ、勉強できる環境づくりをしていただきたい。そして、多くの皆さんに国際交流を体験してほしいと思う。

【バート・メルゲントハイム視察研修レポート】

―笛吹市の姉妹都市、ドイツのバート・メルゲントハイム（Bad Margentheim）を訪ねて―

根津和彦

市の概要

バート・メルゲントハイムは、先祖の残してくれた歴史と伝統・文化をしっかりと伝承しながら、今世を生き、そして未来へと繋げ、より良い社会の実現に向け発展していくことがいかに大切であるかを気づかせてくれた街でした。これからの笛吹市の将来を描くヒントが沢山ある街だと強く感じました。

■バート・メルゲントハイムの歴史

バート・メルゲントハイムは1058年に初めて記録され、1526年から1809年までドイツ騎士団の本部所在地であった。この都市は1926年に温泉地を示す「バート」の名称を、1975年4月1日に大規模郡都市の称号を獲得した。

1991年5月26日に、当時は独立した自治体であった石和町と友好協定を締結し、2007年10月17日にこの協定の有効性が笛吹市との間で確認され姉妹都市となった。

バート・メルゲントハイムの位置■

「バート・メルゲントハイム」は、バーデン・ヴュルテンベルク州にあり、中核区のバート・メルゲントハイム区の他13市区からなる人口約22,000人の中級中心都市。　ロマンチック街道沿いの由緒ある温泉保養地で、ロマンチック街道の北の起点ヴュルツブルクの南西約３５kmに位置している。

歓迎レセプション

市役所での歓迎レセプションでは、ウド・グラッドハール市長はじめ、副市長、国際交流委員会 日本担当者、市役所の職員から歓迎を受け、地元のスパークリングワインで乾杯をしました。

■左からベルンハルト・ガイリン副市長、前島議長、ウド・グラッドハール市長、倉嶋市長、ウルリッヒ・デルナー国際交流委員会 日本担当

■倉島市長とウド・グラッドハール市長による笛吹市／バート・メルゲントハイム市のバッチ交換

市長室で■
倉島市長はじめ視察団全員で署名。

市役所を訪ねて（市民課の説明）

バート・メルゲントハイム市では、年間１２０組のカップルが結婚し、９００人の子どもが産まれている。一方で、年間７００人の方が亡くなられている。人口約２２，０００人の街ですから、単純計算すると年間１割くらい人口が増えている計算になる。

ドイツでは、７０歳以上の高齢者には長寿のお祝いにプレゼントをあげている。市でも高齢者が多いということは、それだけ住みやすい街であるということなんので、とても誇りに思っていると言ってたことが印象的だった。

市民課には、１日に２０～５０人の市民が訪れるが、先ずは「①番の窓口」に行き用件を伝えると、職員がどの窓口に行けば良いかを教えてくれる。市民課以外の課に行く場合もほとんどが市民課の案内を受けている。また、どの課や窓口が何処にあるかも分かりやすく案内があり、サインデザインも素晴らしい。他にも、小さいお子様づれの方のために、手続きをしている間職員がお子様をあずかるサービスもしている。「職員は市民のパートナー」だと言っていた。

とにかく一番驚いたのが、市役所に訪れる市民の数がとても少ない。聞くところによると、最近、書類は、インターネットで取得し記入して提出しているとのことで、その他様々な市役所業務の合理化が進んでいるものと思われる。市の職員は１００人。

■バート・メルゲントハイム駅
市役所の目の前は駅で地下駐車場でつながっている。市の花はバラ。

■新市役所庁舎
2005年に銀行の建物を買い取り改修。地上７階建て、地下は駐車場で車90台分の駐車スペースがある。

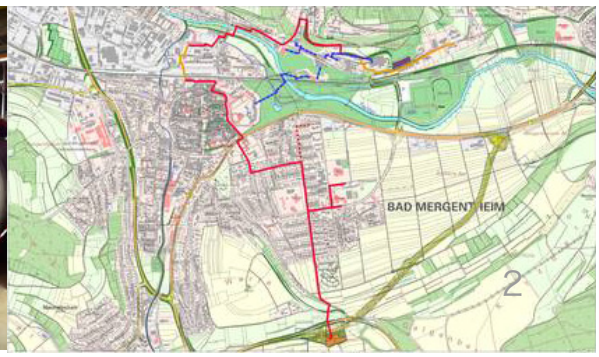
■市の職員と説明頂いた市民課の課長

市民課■
市民は、先ず市民課の①番窓口で案内を受け必要な手続きを行う。小さいお子様づれの方は一時子どもをあずけることもできる。

■旧市役所庁舎
今現在は１階部分を市の観光案内所として使用している。当時から続いている議場をしっかり残し今も使用している。

山林・剪定くずを使った暖房/発電所（Naturwarme＝ネイチャーウォーム）

2013年1月に完成した、山林や高速道路ののり面及び家庭から出る剪定くずを燃やして暖房用のお湯と電気をつくる施設。34,600万kwh（約2,000世帯分）の電気と5,950万kwhのお湯をつくり、市役所や病院などの公共施設を中心に、その周辺の家庭などにも供給している。日中は２人、夜中と休日は無人で稼動。



バート・メルゲントハイム市の産業（経済開発促課　課長）

バート・メルゲントハイムは「健康の街・保養の街」であるが、一方では「教育」と「健康」のリーダーシップをとっている街とも言える。人口22,300人の内、労働人口は11,000人。その内約3,800人が健康関連の仕事に従事している。経済開発促進課は、様々な企業のガイドの役割をしている。

■ボルト社でのそれぞれからの説明風景

「経済開発について」代表的なものにカリタス・ホスピタルとボルト・インダストリーサービス㈱がある。

■カリタス・ホスピタルは、１９４６年に、ヴュルテンベルク・カリタス教会が、アメリカ軍事政府の求めに応じて、結核におかされた難民兵など８００人を受け入れたのを前進とする。カリタス・ホスピタルは、バート・メルゲントハイムの温泉街の中心部に位置し、ドイツの中心的な病院として全国的にサービスを提供しており、ティーチングホスピタルとしても、ヴュルツブルク大学と密接な連携体制を取っている病院。カリタス・ホスピタルの存在は、人々に「健康」をもたらすことによって、経済的要因としても大きな役割を果たしているばかりでなく、市の最大の雇用（約1,400人）の場でもある。そして、その存在が、スパホテル、療養所や診療所といったところまで幅広く波及してきている。

■ボルトは、1945年創業で家族経営からスタートした。現在グループ会社417社、内77社がドイツ国内にあり、その内の１社がこのボルト・インダストリー㈱で、1990年までドイツ軍が所有していた土地を、バート・メルゲントハイム市の支援を受け取得し、1999年に創業。過去15年間で1億ユーロの投資をしている。2012年度の売上金額は、3億45百万ユーロ、2014年度4億ユーロと順調に業績を伸ばしており、ドイツ国内の流通の拠点になっている。

■その他、１９９２年に、マイン・タウバー郡とバート・メルゲントハイム市が中心となり、ベンチャー企業の創業と育成支援を行っている。新しい企業を創出することがこれからの市の発展につながると考えている。

「教育について」２００２年に国際経営学（BWL）を学ぶバーデン・ヴュルテンベルク・モースバッハ・デュアーレ専門大学の外郭施設であるバート・メルゲントハイム・ビジネススクールができた。また、教授学や教師育成（基礎課程・本課程学校）のためのセミナーもある。その他、一般科目教育の学校は、ギムナジウム１校（ドイチュオーデン・ギムナジウム）、実科学校１校（コペルニクス実科学校）、精神・身体障害者のための特殊学校１校（ローレンツ・フリース・シューレ）、本課程学校１校、基礎課程・本課程学校１校、基礎課程学校４校である。これに加え、若年音楽学校と市民大学が１校ずつある。さらに、バート・メルゲントハイムには、マイン・タウバー郡が運営する職業学校センターがあり、企業経済、商業経済、家政学、経済学の学校がある。情報工学、工学、経済学の3つのギムナジウムもこのセンターにある。この他の教育施設には、カトリックの聖ベルンハルト基礎課程学校、カトリックの聖ベルンハルト女子実科学校、バート・メルゲントハイム夜間職業学校、バート・メルゲントハイム教育センター内の物理療法の専門教育で州内に知られたコルピング補習高等専門学校、バート・メルゲントハイム・カタリス病院附属の看護および小児看護学校がある。　市では、これからも「健康」と「産業」の組み合せにを柱として、特にこれからは、「人材育成」に力を入れていくことで市の発展に繋げていく方針である。

■バーデン・ヴュルテンベルグ・モースバッハ・デュアーレ専門大学のバート・メルゲントハイム・キャンパス

大学のバート・メルゲントハイムのキャンパスは、最も小さなキャンパスで、２０１３年時点での学生数は５２０人。学部は、国際経営学（BWL）、健康管理、産業工学があり革新的なビジネスの学位を習得ができる。校舎は、ドイツの歴史と雰囲気を感じるお城で、近代的な講義室やコンピュータ室、約15,000のメディアの大規模なライブラリー、体育館、その他、市のレジャー施設やリラクゼーション施設を利用することもでる。すばらし環境にあるキャンパスには、世界中の多くの国から優秀な学生と講師が集まってきている。２０１７年には、定員を８１０名に増やす計画である。

バート・メルゲントハイム市の温泉と観光

バート・メルゲントハイム市は、ドイツで一番観光に力を入れているバイエルン州とバーデン・ヴュルテンベルグ州の州境にある。バーデン・ヴュルテンベルク州では、「バーデン・ヴュルテンベルク州のクアオルト（Kurort：療養地）とエアフォールングスオルト（Erholungsort：保養地）の認定に関する法」いわゆるクアオルト法を制定している。これは、クアオルトの分類や要件、名称、認定などのほか、エアフォールングスオルト（Erholungsort：保養地）に関する法律で、その中にツーリズム関係の州専門委員会が設置されている。クアオルトの認定には、５つの項目ー①療養要因（学術的経験から認められた自然薬剤もしくは自然療養手段があること）、②生気象（生体におよぼす気象・気候の影響）と空気の質、③一般要求条件と特別要求条件、④環境保護、⑤医学的に鑑定された適応症・禁忌事項ーを備えなければならないことになっている。この認定を受けると、その称号として「バート・BAD」を市の前につけて良いと認められる。バート・メルゲントハイム市は、１９２６年に、この「バート＝Bad」の認証を受けた。　市の中心には３０haのクアパークがあり、その中に６件の一般的クリニックと、糖尿病や拒食症といった病気を診察する専門的なクリニックが１０件ある。また、療養型の病院、高齢者向け住宅、ホテルといった宿泊、滞在、居住施設から、大規模な温泉保養施設（ソリマー）、コンサートホールや５００人収容可能なイベントホールなどもあり、年間１千件のイベントが行われている。年間の訪問客は、延べ人数で日帰り客が約２００万人、２～３週間の滞在客が約７０万人である。　クアパークの中心には、源泉小屋とトリンクテンプルという飲泉施設がある。クアオルトにおける医療の場合、予防や治療、入院や通院の場合など様々あるが、一回最大３週間で４年に一回という割合で保険の適用を受けることができる。実際にクア（治療、療養・保養のための滞在）を実行する場合には、まず、自分の家庭医（ドイツではかかりつけの家庭医制度がある）に出向き、症状を申し述べ、クアでの治療を申請することになる。

　クアパークには、ドイツ騎士団のお城や、協会、城館に１９９６年に設けられたドイツ騎士団博物館が隣接しており、騎士団の歴史の展示や、１５７４年にブラジウス・ベルヴァルトが建設した「ベルヴァルト階段」と呼ばれる螺旋階段を見学することもできる。 また、広場を中心とした街の中心街もとてもメルヘンチックで観光客を楽しませてくれる。　療養や保養で訪れた人達や観光客は、公園内を散歩したり、周辺を自転車でツーリングしたり、ハイキングしたり、またそうしたコースの案内もされている。　街の郊外には、家族向けに３５ha の 野生の動物公園、ホテルもあり、子どもからお年寄りまで楽しめるような配慮がなされている。

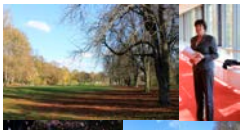
■ドイツ騎士団のお城・協会

■街の中心
上：旧市庁舎と中心広場
下：商店街

■クアパーク内の様々な施設

▲ホスピタル　▲マンション

◂コンサートホール



◂イベントホール

▼飲泉場所

■クアパークの中心にある
源泉小屋

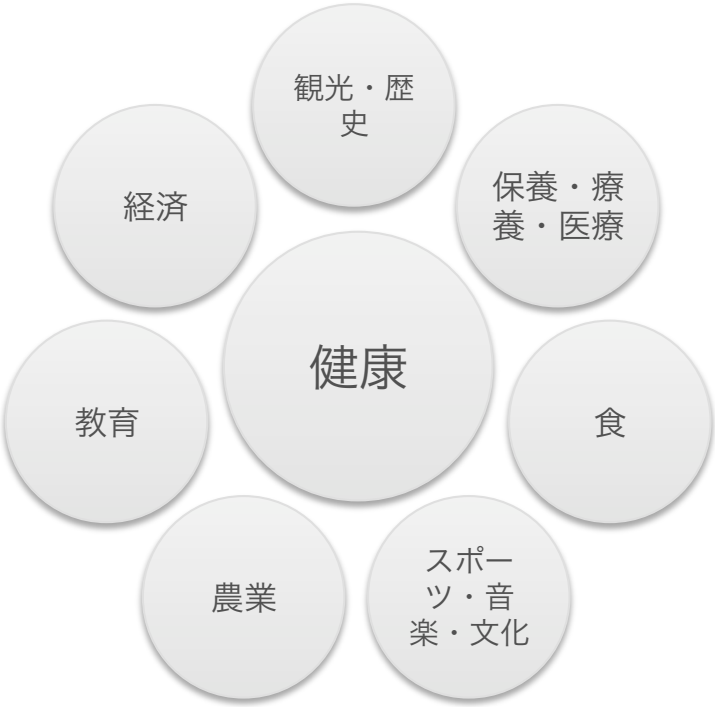
バート・メルゲントハイム市を訪れての感想

かつて自分達の先祖がなぜこの地を選んだのか。この地でどんな生活を目指したのか。そのことをしっかりと考え、繋げてきていることにとても感銘を受けました。そして、その築き上げてきた歴史と伝統・文化をしっかりと 次世代に繋げ、より良い社会の実現に向け発展させていこうとしている彼らの姿を、学ばなくてはならないと強く感じました。

笛吹市のこれからを考える

さて、これから私達は、笛吹市の発展をどのように考えたら良いのか。まず、笛吹市の現状とこれからを考える上において、人口を把握することが大切だと考えます。

笛吹市人口推移予測	2014年	2020年	2035年	
	現在	2022年に団塊の世代が後期高齢者（75歳）に突入	20年後	
総人口	71,724	69,460	63,642	
年齢別人口	年少人口		6,931	10.9%
	生産年齢人口		35,093	55.1%
	老年人口		21,618	34.0%
	内75歳以上人口		12,637	19.9%

■笛吹市の人口推移予測をみると、２０３５年には、少年人口が全体の10.9%、生産年齢人口が55.1%、老年人口が34.0%、内75歳以上が19.9%。２０年後に、６５歳以上の方が人口の約３４％をしめることになります。

この将来訪れる現実を直視し、笛吹市の将来の発展をポジティブに考えるに、下図に示すような「健康」を核とした中で、温泉を利用した「保養・療養・医療施設の充実」また、それに伴った教育、観光産業の育成。加えて、農業と食の「６次産業化の促進と新規事業の育成」に力を注ぐことが、「経済の発展」にもつながるように思う。関連して、笛吹市民が、いつまでも「健康でこころ穏やかにくらせるように」「スポーツや音楽」にも力を注ぎ、地域の「文化育成」にまでつなげていけるように、市民と行政が一体となって“よりよき街づくり”を進めていけたら良いと思います。そのためにも、バート・メルゲントハイム市との友好関係を益々強固なものにし、両市の発展につなげて行けたら良いと思います。